

大聖寺藩前期の能楽

A History of Nogaku in the Early Period of the Daishoji Domain

西 村 聡

公立小松大学

Abstract: Nogaku in the early period of the Daishoji domain has been little studied. In this paper, we have comprehensively searched for materials related to Nogaku in Edo, Kanazawa, and Daishoji, and uncovered numerous records of Nogaku events and performances. As a result, it became clear that the third lord MAEDA Toshinao was strongly influenced by Shogun TOKUGAWA Tsunayoshi, and that the fourth lord MAEDA Toshiakira himself performed Noh at the Kaga domain residence in Edo and Kanazawa Castle, and that when they were transferred from Edo to the Daishoji domain, they held large-scale Nogaku performances to publicize the dignity of the domain lord to the people of the domain.

Keywords: Nogaku, Daishoji domain, TOKUGAWA Tsunayoshi, MAEDA Toshinao, MAEDA Toshiakira

はじめに

大聖寺藩の歴史は寛永16（1639）年6月、加賀藩主前田利常が致仕を許され、藩領7万石を3男利治に分与して大聖寺居館に住まわせた時に始まる。その終焉は明治4（1871）年7月の廃藩置県令による。この間、232年の大聖寺藩時代に行われた能楽については、宮本圭造『近世諸藩能役者由緒書集成』上（法政大学能楽研究所、能楽資料叢書5、2019）に、大聖寺藩旧蔵の能面・狂言面が多く伝存すること、『大聖寺藩士由緒帳』（『加賀市史料』二・三・四〔牧野隆信、加賀市立図書館、1982～1984〕所収）には狂言方を勤めた尾崎家の由緒書しか記載がなく、「これまでまとまった研究がほとんどない」ことが指摘されている。実際、『大聖寺藩史』（大聖寺藩史編纂会、1938）や『加賀市史通史編』上・下（加賀市史編纂委員会、1978・1979）などの通史記述においても、最後の藩主前田利邨の嗜みに言及する以上のことはなく、大聖寺藩の能楽は今後の説明が待たれている。

近年、それらの通史記述に利用された資料の全文翻刻が進み、前掲『加賀市史料』全10冊（1981～1990）のほか、山口隆治『大聖寺藩の武家文書』全10冊（北陸印刷、2008～2021）、同『大

『聖寺藩の諸家文書』全3冊（ホクト印刷、2008～2010）、同『大聖寺藩の村方文書』1冊（北陸印刷、2010）などから、従来看過されてきた能楽関連記事が、断片的であっても少なからず存在することが知られるようになった。

大聖寺藩主は多くその幼少期を金沢や江戸で送り、加賀藩の能楽が身近に感じられる環境にいた。むしろ藩主候補者の英才教育の一環として能楽に親しんでいた。大聖寺藩主が参勤交代の途次、金沢城に立ち寄り、能楽をもって歓待される事例も見られる。大聖寺藩の能楽は金沢や江戸からも光を当てる必要がある。その資料は『加賀藩史料』全16冊（前田育徳会、1929～1943）、『加賀藩史料藩末編』全2冊（前田育徳会、1958）をはじめとする加賀藩の資料で補完できる。

本稿では、大聖寺藩の資料を能楽研究の視点で、また加賀藩の資料を大聖寺藩研究の視点で、それぞれ拾い直し再読しながら、3代前田利直、4代前田利章の治藩期を中心に、大聖寺藩前期の能楽を見通したい。幕藩体制下の能楽の広がりや、小藩の実態を集積してこそ全体が把握できるはずである。

1. 江戸城で演能する大聖寺藩主、3代前田利直

前田利常の加賀藩主在任期に重なる元和・寛永年間（1615-1643）、江戸では大御所徳川秀忠・将軍徳川家光の大名御成が頻繁に行われている。その際、大名が饗応に要した時間と支出は多く能楽に割かれた。外様の大藩を代表する前田利常は御成の対応に追われ、諸橋・波吉ら在地の役者に加えて、京都の竹田権兵衛・石井仁兵衛らを抱え、江戸藩邸の催能には徳川秀忠ひいきの北七大夫を重用した。金沢城では前田利常以後の代替わりの入国祝賀能（利常嫡男光高・利常嫡孫綱紀）が挙行され、前田利常の隠居した小松城でも竹田権兵衛らの演能を町人に見せている。加賀の国元では能楽を催すことで、藩士や領民に藩主の威勢を誇示してきた¹⁾。

前田利常は江戸藩邸でも加賀の国元でもこのように能楽を政治的に利用した。自身の嗜好のために観能・演能を繰り返した様子はない。徳川秀忠・徳川家光は観能を好んだが、演能する快感を覚えたわけではない。したがって御成能には最高の玄人役者を揃えるだけで済んだ。将軍や藩主たちが演能の主体となる私的な催能が増えるのは、徳川綱吉の将軍在任期に重なる貞享・元禄年間（1684-1703）である。

大聖寺藩最後の藩主前田利邇の家令を務めた清水沖一郎が『聖城公論』108号（昭和5（1930）年8月3日）に発表し、佐藤芳彦『続・九段下より』（わんや書店、1982）に再掲された「能楽の勃興と大聖寺藩」と題する短編には、①大聖寺藩の最初期から能楽が盛んであった、②初代前田利治・2代前田利明・3代前田利直・4代前田利章がどれほど能楽に通じていたかは記録に証拠がない、③正月の嘉例として〈高砂〉〈東北〉〈狸々〉の松囃子（謡初）があった、④藩主の入部、官位昇進、病氣平癒の吉事には祝賀能が催された、⑤立役・地謡・囃子方はみな家来であった、⑥常設の能舞台はなく、書院の床張りを敷舞台型とした、⑦能芸に秀でた藩主は5代前田利道と14代前田利邇の2人であったことなどが記されている。

いずれも貴重な証言であるが、①と②は両立しがたい。初代前田利治・2代前田利明の大聖寺藩主在任期は、4代將軍徳川家綱のもとで幕府が能楽の統制を進め、江戸城の催能自体が激減している²⁾。前田綱紀晩年の談話『松雲公御夜話』によれば、前田綱紀の記憶では祖父の前田利常が生前に能楽を催したことはなく、幕府の催能も徳川家綱の將軍宣下能、同じく徳川家綱の疱瘡平癒祝儀能の両度しか覚えがないという³⁾。そのような時期に大聖寺藩が加賀藩の旧例を模倣して急いで役者を抱える必要も、恐らく財政的な余裕もなかったであろう。③以下を含む大聖寺藩の能楽の実質は、記録の残る3代前田利直の代に始まる。

大聖寺藩の3代藩主前田利直（1672-1710）は江戸に生まれ、藩主就任の前年、元禄4（1691）年8月に幕府奥詰を命じられた。以後、徳川綱吉が没する宝永6（1709）年1月まで、將軍徳川綱吉に近侍した。徳川綱吉は豊臣秀吉以上の稀代の能狂と言われる。徳川綱吉は自らの演能を大名に拝見させ、大名を指名して演能を強要した。加賀藩主前田綱紀も貞享3（1686）年以来3度、江戸城での演能を重ねていたが、『徳川実紀』記載の範囲で、前田利直もまた元禄6（1693）年から元禄12（1699）年までの間に以下の6度、江戸城で能または舞囃子を演じている。

- 元禄6（1693）年4月11日、徳川綱吉は御三家及び甲府綱豊に『中庸』を講じた後、能3番を演じた。会津藩主保科正容は〈田村〉、大聖寺藩主**前田利直**は〈猩々〉を演じた。
- 元禄7（1694）年4月26日、徳川綱吉は加賀藩主前田綱紀ら諸大名に『論語』を講じ、徳川光圀に『大学』を講じさせた後、能3番を演じた。**前田利直**は〈氷室〉、膳所藩主世嗣本多康命は〈忠度〉を演じた。
- 元禄8（1695）年3月12日、徳川綱吉は公卿、仁和寺門跡らに『易経』を講じた後、能4番を演じた。**前田利直**は〈田村〉、保科正容は〈山姥〉を演じた。
- 元禄10（1697）年3月26日、徳川綱吉は能3番を演じて諸大名に拝見させた。舟戸藩主本多正永は〈八鳥〉、**前田利直**は〈小鍛冶〉を演じた。
- 元禄11（1698）年2月1日、徳川綱吉は日光門跡らに『易経』を講じた後、舞囃子13番を舞った。**前田利直**や黒田直邦（後に下館藩主）も舞った。
- 元禄12（1699）年11月26日、徳川綱吉は前田綱紀らに講じた後、能3番を演じた。黒田直邦は〈忠度〉、**前田利直**は〈猩々〉を演じた。

徳川綱吉が江戸城や御成先大名邸で演能する機会（番数ではない）は、例えば元禄10（1697）年には50回を数えた⁴⁾。前田利直が年に1回程度の割合で演能しても、それを特別数が多いとも、徳川綱吉に寵愛された表れとも言えないであろう。前田利直やここに名前の挙がる近臣たちは、徳川綱吉が気軽に演能を命じて、自分の演能の引き立て役にできる人々であったらしい。それにしても、前田綱紀・前田利直ら徳川綱吉時代の藩主たちは、徳川綱吉と観能を共にするだけでなく、江戸城で演能することまで求められた。以来、加賀藩では前田綱紀の経験を踏まえて、世嗣幼少期から能芸を嗜ませるようになる。

前田利直の住む江戸の大聖寺藩邸は加賀藩本郷邸の一部であり、元禄10（1697）年11月2日

には、前田綱紀が従弟の前田利直を大聖寺藩邸に訪問して、演者等詳細は不明ながら能7番が供されている（大聖寺藩士野尻与三左衛門〔院号が一蓬〕の日記を曾孫野尻後藤太が抜書した『一蓬君日記抜書』⁵⁾）。さらに元禄11（1698）年1月2日には大聖寺藩邸の小書院で謡初が行われ（同書）、同年4月18日には、前田綱紀の世嗣吉徳（幼名勝次郎）が9歳で能の稽古を始めている（『加賀藩史料』所引『政隣記』）。元禄15（1702）年2月25日は、前田家が祖先とする菅原道真800年祭に大聖寺藩で「御能」を催行した（『一蓬君日記抜書』）。

前田綱紀と前田利直は互いの存在を意識する距離で、それぞれ徳川綱吉の影響を受け、能楽への関与を深めた。ともに江戸城の将軍御前で能を演じた。その2人が顔を揃えて、徳川綱吉の加賀藩本郷邸御成を迎えたのは、元禄15（1702）年4月26日のことである。『徳川実紀』には奥書院で饗膳の後、徳川綱吉の講書、前田綱紀の進講に続いて猿楽（能楽）があり、〈翁〉〈高砂〉〈東北〉・祝言・狂言〈末広かり〉等が演じられたと記している。また表書院に移動して徳川綱吉以下、前田綱紀・前田吉徳父子、縁戚の広島藩主浅野綱長・浅野吉長父子、鳥取藩主池田吉泰が各々仕舞を披露した。能の演者名、仕舞の演目は『加賀藩史料』所引『前田家雑録』に記載がある。

ところで『徳川実紀』と『前田家雑録』の両書には祝言の曲名と狂言〈末広かり〉の演者名が記載されていない。金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫蔵『太閤并將軍家御成記』、同『御成之記』によれば、祝言は〈呉服〉、狂言〈末広かり〉のシテは鷺仁右衛門であることが知られる。能は観世大夫の〈翁〉〈高砂〉、竹田権兵衛の〈東北〉、諸橋権進（前名陸之丞。2世諸橋喜大夫の養子）の祝言〈呉服〉であり、謡初を連想させる選曲になっている。番数は元和・寛永期の御成能の半分に過ぎず⁶⁾、意外に禁欲的な感があるが、これは主客たる徳川綱吉の講書（『太閤并將軍家御成記』に『論語』為政篇とする）と仕舞（徳川綱吉3番。他者と併せて9番）に時間を割くためであろう。なお徳川綱吉ひいきの宝生大夫将監友春は、能のシテではなく、特に徳川綱吉の仕舞の地謡を勤めたか、出勤はしていて、「盃一箱百包のし」を拝領している（『太閤并將軍家御成記』）。

こうして徳川綱吉の加賀藩本郷邸御成は首尾よく終了した。『加賀藩史料』所引『政隣記』にはその祝儀につき前田綱紀が5月下旬から8月中旬にかけて8回、老中、譜代大名、一門、旗本、仙溪院（前田利常娘。保科正経正室）、護持院等、増上寺等、上野凌雲院等を招請し、毎度能楽（後宴能）を催したとする。それぞれの番組は省略され、6月19日（仙溪院招請）の分のみが『一蓬君日記抜書』に記載されている。『大聖寺藩の武家文書(2)』及び『大聖寺藩の諸家文書(2)』収載の同書には、なぜか能のシテの名前が欠落している。『えぬのくに』収載の同書によれば〈翁〉〈白髭〉を宝生大夫（将監友春）、〈箆〉を宝生造酒之丞（友春の子。将監暢栄）、〈源氏供養〉を竹田権兵衛（広富）、〈大会〉を宝生嘉内（友春の子。分家初代）、〈三井寺〉を竹田権兵衛、〈盛久〉を竹田庄五郎、〈乱〉を諸橋権進が勤めた。むしろ加賀藩能楽史にとって有益な情報であり、ここに付言しておく。

2. 大聖寺居館に流入する江戸の風儀

前田利直は元禄5（1692）年に大聖寺藩3代藩主となった。長く幕府奥詰として徳川綱吉に近侍したため、許されて大聖寺藩への入部を果たしたのは、宝永1（1704）年6月23日のことであった。大聖寺居館は元禄6（1693）年7月14日に焼失していた。初入部した前田利直は屋敷内に新殿を建て、移徙を終えた後の11月に新殿で祝儀能を催行した。『加賀市史料』五所収『御算用場留書』は11月10日条に普請・移徙を祝う催しであるとし、小算用6人が9日に拝見したことを記している。祝儀能にしては拝見人の数が少ないように見えるが、これが拝見人のすべてではなく、あくまで御算用場から拝見に出た藩士の名前を記録したものである。

『一蓬君日記抜書』によれば、祝儀能の実際は11月9日から11日にかけて3日連続する大規模な催しであった。同書はこれを入部祝儀の催しであるとし、9日・10日は家中（藩士）及び御用達町人80人余、11日は町医者50人及び寺社方が拝見したと記している。『御算用場留書』に記載する小算用6人は9日分の藩士に含まれていることになる。祝儀能の演目・演者等については、両書とも記載がない。

翌年の宝永2（1705）年2月6日、前田利直の新殿で今度は十村（大庄屋）や山中村の肝煎などを拝見人とする「御能」が催行された（『御算用場留書』⁷⁾）。『大聖寺藩の村方文書』所収『十村御用記録』（鹿野家文書の内）の記述はやや詳細で、拝見人は舞台を西に見て白洲の東、廊下の南の畳の上で観能したとあり、新殿には舞台が設けられ、舞台と観覧場所は白洲で隔てられていたことが分かる。

焼失した大聖寺居館の平面図（『加賀市史通史』上巻付載「大聖寺藩邸図」）には舞台が描かれていない。舞台は新殿普請の折に前田利直の意向により新設されたと考えられる。前田利直は実はこの機に城郭を備え、大聖寺城を構える望みを抱いて、幕府や加賀藩に請願したが、許されなかったとされる（『大聖寺藩史』）。それでも藩主居館に舞台の新設を果たしたのは、徳川綱吉が君臨する江戸城の舞台に親しみ、その必要性と利用価値を早くに感じ取っていたからであろう。

『十村御用記録』には当日の能の演目が記されている。〈鶴亀〉〈朝長〉〈野々宮〉〈大会〉〈班女〉〈野守〉〈舟弁慶〉〈松虫〉〈鍾馗〉の9番の内、〈朝長〉〈班女〉〈野守〉の3番は前田利直がシテを演じたという。役者付（配役）や狂言の演目などは、前日配布された番付に記載されていたようである。前田利直の初入部は藩主就任後12年を要したから、この間大聖寺に居住して能・狂言を勤める玄人役者がいたはずはなく、演能に使用する面・装束・楽器類が藩主不在の大聖寺居館で管理されていたとも思えない。舞台は新設できても、それらの人や物をどう調達したのであろうか。江戸の大聖寺藩邸で前田利直に仕え、入部に随伴した家臣たちが江戸で能芸を嗜み、面・装束・楽器類も大聖寺へ運んだことや、金沢から加賀藩の人・物を借りて間に合わせたことが想像される。

宝永1（1704）年11月から宝永2（1705）年2月にかけての都合4日間の入部・新築祝儀能は、前田利直が大聖寺の藩士たちや、町方・村方の有力者たちに、藩主の存在を誇示する場とな

った。自らシテを演じることで藩主の威厳は高く保たれる。それが徳川綱吉に近侍して学んだ、能楽の政治的利用価値である。前田利直はまた入部・新築祝儀能と同じ時期（11月・12月）に家老宅に「御成」を繰り返して、人心の掌握に努めている。家老の1人神谷守応（「外史」と通称される）宅では移徙の祝いとして拍子（舞囃子）も行われた（『一蓬君日記抜書』）。

宝永2（1705）年は1月2日に謡初（「御諷始」）があった。『一蓬君日記抜書』に演者・演目は記されていない。『加賀藩史料』掲載の範囲では元禄5（1692）年1月2日、加賀藩江戸藩邸の謡初に宝生吉之助が今年初めて規式を勤めたとある（『参議公年表』〔参議公は前田綱紀〕）。加賀藩主前田綱紀は貞享3（1686）年に江戸城で演能する機に徳川綱吉ひいきの宝生大夫友春に入門しているが、その次男宝生吉之助を分家嘉内家祖として加賀藩の御手役者（専業役者）に抱えた。

徳川幕府の謡初は承応3（1654）年以後、1月3日に行われ、恒例化していたので⁸⁾、『徳川実紀』にも例年、「三日規のごとし。謡曲始も同じ」（元禄5（1692）年1月3日条）と略記されるのみである。『参議公年表』の当該記事は、加賀藩江戸藩邸でも徳川幕府に倣い、幕府の旧式日（1月2日）に「規式」として謡初を行う慣習があったと読める。

金沢城の謡初に関しては、『加賀藩史料』掲載の範囲で『政隣記』記載の寛保2（1742）年分が最も早く、よく知られている⁹⁾。これとは別に、金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫蔵『謡初之覚』は宝永4（1707）年から寛延4（1751）年にかけての謡初の御肴役等（演目・演者ではない）の記録であり、また前田土佐守家資料館蔵『能番組并茶席様子覚書』には、さらに早く元禄2（1689）年1月2日の謡初の番組が記載されている。この時は京都居住の御手役者、金春流別家の竹田権兵衛¹⁰⁾が〈弓八幡〉と〈猩々〉を、金沢居住の御手役者諸橋喜大夫（諸橋大夫2世）が〈東北〉を勤めている。

加賀藩における謡初の始まりは定かでないが、江戸の藩邸でも金沢城でも、藩主滞在の年に謡初を行うことは、遅くとも貞享・元禄期には定着していたと見てよいであろう。金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫蔵『能楽番附』第2冊『御能御囃子』に元禄14（1701）年1月2日の金沢城の「御松囃子」（諸橋権之進〔2世喜大夫であろう。この年病没〕・諸橋陸丞〔3世陸之丞であろう。この年相続、権進と改名〕ら出勤）、また同『能楽番附』第3冊『江戸御能番付』に元禄15（1702）年1月2日の江戸藩邸の「御松囃子」（宝生嘉内・宝生将監・諸橋権之進〔3世権進〕ら出勤）が行われたことを記載している。なお、「御松囃子」の称については、『加賀藩史料』天保2（1831）年1月2日条所引『温敬公記史料』（温敬公は前田齊泰）に一昨年以降、「松囃」を「謡初」と改称したとある。

大聖寺藩の江戸藩邸では元禄11（1698）年1月2日に謡初が行われたと前節に述べたが、前田利直入部翌年の宝永2（1705）年の謡初（前述の「御諷始」）は、これも江戸の風儀を大聖寺居館に持ち込む結果となった。『一蓬君日記抜書』によれば、その後、宝永7（1710）年、正徳2（1712）年に大聖寺居館で謡初が行われたことが確認できる。

宝永2（1705）年3月16日、前田利直は参勤交代で江戸へ向かう途中、金沢に逗留し、金沢城

では「御能」が催行されたと『一蓬君日記抜書』に記している。宝永3（1706）年暮れには前田利直が従四位下に叙せられたと、江戸から大聖寺に飛脚が到来する。さっそく宝永4（1707）年1月16日は大年寄神谷守応宅、19日は家老生駒源五兵衛宅で、藩士を招請して祝儀の囃子を演奏した。これには「歩行町人」が役を勤めたとされる。前に引いた清水沖一郎「能楽の勃興と大聖寺藩」には、「立役・地謡・囃子方はみな家来であった」とされるが、この記事（『一蓬君日記抜書』）から家来とは歩行（徒士）のことであり、町人も加わったことが知られる。

宝永6（1709）年は1月10日に徳川綱吉が病没し、前田利直は幕府奥詰の役を解かれて、6月4日に大聖寺に帰藩した。前田利直自身も翌年の宝永7（1710）年12月13日に江戸で病没している。

この間、宝永6（1709）年5月の江戸では徳川家宣の將軍宣下祝賀能があり、加賀藩邸でも7月4日に閣老を招き、將軍宣下の終了を祝う能楽が催行された。大聖寺では前田利直の帰藩後の7月7日、神谷守応宅で前田利直の鷹狩りの獲物、水鶏を拝領した喜びに客を数十人招き、囃子（〈高砂〉〈東北〉〈祝言・養老〉）を催している。7月25日は大聖寺居館で「御能」が催行され、能は〈養老〉〈忠度〉〈楊貴妃〉〈雷電〉〈小袖曾我〉〈海士〉〈金札〉の7番、狂言は〈筑紫輿〉〈入間川〉〈盆山〉の3番が演じられた。この内、〈雷電〉〈海士〉の能2番は前田利直がシテを演じている。前田利直自身のための慰み能であつたらしい。9月6日は前田利直が神谷守応宅を訪れ、囃子ではなく「御能」が行われている（『一蓬君日記抜書』）。これも前田利直自身が演能した可能性がある。

3. 金沢育ちの大聖寺藩主、4代前田利章による演能と催能

大聖寺藩3代藩主前田利直には男子がなく、宝永7（1710）年12月14日、加賀藩主前田綱紀の子の前田利章（1691-1737）を末期養子とすることが徳川幕府の承認を得た。これに先立つ宝永6（1709）年7月27日、江戸の加賀藩邸では兄前田吉徳（加賀藩世嗣）の正室松姫（徳川綱吉養女）を招請して能楽が催行された。松姫の所望により前田綱紀が〈龍田〉を、前田利章が〈小督〉を演じている。急な所望のため装束の用意に苦労したらしい（『政隣記』）。それでも前田利章が演能できたことに注目したい。

前田利章は兄前田吉徳と1歳違いであり、元禄11（1698）年に能の稽古を始めた兄前田吉徳（当時9歳）に続いて、同じ頃に能の稽古を始めていたであろう。前田吉徳は江戸に生まれ、宝生嘉内・諸橋陸之丞（後の権進）を指南役とした。前田利章は金沢で生まれ、宝永4（1707）年10月に出府、宝永5（1708）年3月28日に初めて江戸城に登り、徳川綱吉に謁見した。松姫の所望に応じたのは翌年のことであるから、10年近い稽古期間の大部分は諸橋喜大夫・陸之丞（権進）など金沢居住の御手役者の指導を受け、その蓄積があつて松姫の所望に対応できたと思われる。

正徳1（1711）年は前田利章が大聖寺襲封を命じられ、大聖寺に入部した年である。入部前の7月4日、前田綱紀は江戸の加賀藩邸（駒込邸）に前田利章を招請し、小謡・囃子で家督の相続

と初入部を祝福した（『加賀藩史料』所引『政隣記』）。前田利章が入部した翌日の9月16日、大聖寺居館では家中惣御目見があり、囃子・仕舞が行われた。囃子と仕舞の区別はつかないが、〈高砂〉〈東北〉〈龍田〉〈芦刈〉〈祝言・猩々〉の5番の内、〈東北〉を前田利章が舞っている。他の演者（シテ）は市正・軍兵エ・源右エ門・新十郎の4人である（『一蓬君日記抜書』）。

続いて同年10月11日には大聖寺居館で「御能」が催行され、物頭中に拝見が命じられた（『一蓬君日記抜書』）。番組は新十郎・助之進の〈長良（〈張良〉であろう）〉、市正の〈田村〉、前田利章・万右エ門の〈江口〉、前田利章・助之進の〈花筐〉、軍兵エ・小左エ門の〈鉄輪〉、源右エ門の〈芦刈〉、前田利章・助之進の〈螭（「融」の誤写または誤刻であろう。「融」の異体字は偏が「虫」、旁は「鬲」）〉の能7番である。前田利章以外の演者は9月16日の囃子・仕舞の演者と重なり、市正・軍兵エ・源右エ門・新十郎の4人にワキを勤めたらしい助之進・万右エ門・小左衛門の3人が加わっている。狂言は記載がない。

11月6日には金沢城で前田吉徳夫人松姫から前田綱紀に贈られた茶を披露する「御能」が催行された（『加賀藩史料』所引『政隣記』）。この時は前田利章は〈頼政〉を演じ、加賀八家の長又三郎（高連）に〈小鍛冶〉、同じく前田大炊（孝資）に〈龍田〉の演能が命じられた。前田利章は10月28日に旅宿に着き、12月6日に大聖寺に帰った。『一蓬君日記抜書』には前田利章が10月27日大聖寺を出発し、松任に1泊したこと、金沢を出発した12月6日は小松に1泊して7日に大聖寺へ帰着したことが記されている。前田利章の演能記録が加賀藩の資料で補完できる1例である。

正徳2（1712）年1月2日、大聖寺居館では前述の謡初が行われた（『一蓬君日記抜書』）。仕舞・囃子は源右エ門〈老松〉、前田利章〈東北〉、新十郎〈龍田〉、源右エ門〈小督〉、新十郎〈猩々〉であった。演者は藩主の前田利章を含めていつもの顔ぶれで、番組を一見しただけでは謡初と気づきにくい。謡初は新年の嘉例として能役者が祝言の謡を謡い、藩主は祝宴の首座にあって料理や酒を藩士に振る舞う。参仕する役者の側に身を置く藩主の姿は異色と見られるが、藩主が機嫌よく謡い舞うことが藩にとっては祝賀の気分を盛り上げるのであろうか。大聖寺藩における謡初の今後の推移を注視したい。

大聖寺藩では3代前田利直から4代前田利章への藩主継承の前後に重大案件が相次いでいた。前田利直が幕府奥詰の任を解かれた宝永6（1709）年2月18日、前田利直の弟前田利昌（大聖寺新田藩主）が大和国柳本藩主織田秀親刺殺の咎で切腹し、新田領が大聖寺藩に戻された（『大聖寺藩の武家文書（1）』所収『御系譜』）。宝永7（1710）年2月26日、前田利直は後用金（前田利常分与の予備金）濫費の咎で家老村井主殿に切腹を命じ、村井一派の処分を断行した¹¹⁾。

正徳2（1712）年秋、暴風雨による米の減収が原因で江沼郡那谷村で百姓一揆が起り、前田利章はその対応に苦慮し、藩の財政も疲弊した（『加賀藩史料』10月6日条及び『大聖寺藩史』）。正徳3（1713）年閏5月16日、前田利章は大聖寺藩士8人を加賀藩に異動させ、人件費負担の軽減を図った（『加賀藩史料』同日条）。同年8月20日、家老神谷守応が藩が藩士に貸し付けた拝借

金の返還を強要したとして藩士が強訴し、大聖寺藩は加賀藩から事態収拾の指導を受けた（『加賀藩史料』同日条及び9月5日条、9月28日条）。

こうした大聖寺藩内の政情不安定により、正徳2（1712）年1月2日の謡初以降、前田利章による能楽の催行はしばらく中断する。前田利章は正徳4（1714）年1月28日に金沢城に登城、正徳5（1715）年9月19日は参勤交代の帰途、金沢城に立ち寄っている（いずれも『加賀藩史料』当日条）。金沢城で能楽が催された記録は見え、前田利章は引き続き本藩の指示や援助を仰いだことが想像される。

4. 金沢町役者指物屋新次、大聖寺藩士松見主馬となる

享保2（1717）年11月6日・7日の両日、金沢城で徳川吉宗の將軍宣下祝賀能が催行された（江戸の加賀藩邸に老中らを招請しての祝賀能は前年11月21日に行われた）。これに先立ち加賀藩主の前田綱紀及び大聖寺藩主前田利章は各々帰国している。『一蓬君日記抜書』には前田利章が10月30日に金沢へ出発し、11月23日に大聖寺へ帰ったとのみ記されている。加賀藩士大野木克寛の日記（『大野木克寛日記』）には、この前田綱紀が催した「御代替御祝儀御能」の主客を豊姫（前田利章の同母姉。前田孝資室）・前田利章姉弟とし、翁付五番立の番組が掲載されている（シテは竹田権兵衛・諸橋権進・波吉右内ら）¹²⁾。

続いて11月15日、金沢城では豊姫から御膳進献があつて「御能」が命じられ、前田利章が登城した後、竹田権兵衛ら御手役者による本格的な「御能」が開始された。この時は前田利章も〈三井寺〉を演じている（『大野木克寛日記』）。

さらに同年11月24日、金沢の町役者たちが大聖寺居館の「御能」出勤のため大聖寺に到着する（『一蓬君日記抜書』）。笛方鷺田五郎兵衛、大鼓方鶴来屋庄七、ツレ役指物屋新次、地謡角屋惣四郎、同疋田屋三郎兵衛、庄七後見人富田屋半七の6人である。この内、鷺田・鶴来屋・角屋・疋田屋の4人は金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫蔵『享保十年乙巳年御入国以後之御祝御能被仰付候時分相勤候江戸京御当地御役者且亦御細工方人々覚』¹³⁾に名前が記載されていて、享保10（1725）年には鷺田はすでに物故、鶴来屋は石井仁兵衛弟子、角屋は諸橋権進取立、宝生座地頭三谷太右衛門弟子、疋田屋は諸橋権進弟子であることが知られる。

大聖寺居館の「御能」は11月28日及びその後両度催行され、3日間の舞台を勤めた6人は12月10日に諸手当を支給されて金沢へ帰った。『一蓬君日記抜書』には11月28日分のみ番組の記載がある（〔 〕内に役種を補う。下線部は金沢の町役者）¹⁴⁾。

- ・弓八幡〔シテ〕新十郎、〔ツレ〕（指物屋）新次、〔ワキ〕助之進、〔ワキツレ〕小左エ門・左二兵衛、〔笛〕（鷺田）五郎兵衛、〔小鼓〕勘七、〔大鼓〕甚兵衛、〔太鼓〕兵馬
- ・田村〔シテ〕小隼人、〔ワキ〕覚右エ門、〔ワキツレ〕小左エ門・左理兵衛、〔笛〕忠三郎、〔小鼓〕木曾右衛門、〔大鼓〕（鶴来屋）庄七
- ・東北〔シテ〕公（前田利章）、〔ワキ〕助之進、〔ワキツレ〕左次兵衛・小左エ門、〔笛〕（鷺田）

五郎兵衛、〔小鼓〕 治助、〔大鼓〕 甚兵衛

- 自然居士 〔シテ〕 公（前田利章）、〔子方〕 迄之助、〔ワキ〕 助之進、〔ワキツレ〕 覚右エ門、〔笛〕 忠三郎、〔小鼓〕 勘七、〔大鼓〕（鶴来屋） 庄七
- 祝言猩々 〔シテ〕 新十郎、〔ワキ〕 覚右エ門、〔笛〕 忠三郎、〔小鼓〕 木曾右エ門、〔大鼓〕 甚左エ門、〔太鼓〕 庄五郎
- 狂言末広 藤次郎・武大夫／狂言不聞座頭 五十郎・藤次郎／狂言仏師 藤次郎・只六

大聖寺居館では今回の享保2（1717）年暮以来、前田利章が病没する元文2（1737）年まで催能の形跡が認められないが、前述のとおり、大聖寺藩主となった正徳1（1711）年以来、前田利章はしばしば金沢城に立ち寄っている。江戸の加賀藩邸でも饗応を受けることがあり（能楽を伴わない饗応は省略した）、こうした折々に演能・観能を楽しんでいる。今回金沢の町役者を大聖寺に招いて本格的な「御能」を催行したのも、金沢城での將軍宣下祝賀能に触発され、大聖寺藩でも將軍宣下祝賀能を挙行する意を込めた可能性がある。

大聖寺藩は未だ金沢居住の諸橋権進のような専門の能役者を抱えていなかった。藩主の前田利章は参勤交代で江戸に出た折に、加賀藩抱えの宝生嘉内らの演能を見、稽古を受ける機会はあるが、今回は大聖寺に金沢の町役者を呼び寄せ、催能の形式を整えている。政治的には懸案諸事項の処理が進み、大聖寺藩が落ち着きを取り戻したと実感して、その印象を藩内で共有したかっただろう。前田利章個人の嗜好としては、催能がしばらく途絶えた渴きをいやしたかっただろう。前田利章はこれまで〈小督〉〈江口〉〈花筐〉〈融〉〈頼政〉〈三井寺〉などを演じてきた。今回新たに〈自然居士〉が所演曲に加わり、演能意欲が再燃したと見える。そして、もう1番は演じ馴れた〈東北〉で済ませる余裕のなさもうかがわれる。

また、今回出勤した役者の顔ぶれを眺めてみると、本稿に言及した範囲では、大聖寺の能楽でシテを勤めた者に市正・軍兵エ・源右エ門・新十郎の4人、ワキを勤めた者に助之進・万右エ門・小左衛門の3人がいたが、今回番組の詳細が記録されたことで、ワキツレに左二兵エ（左理兵・左次兵も同人か）・覚エ門、笛に兵馬、小鼓に勘七・木曾右衛門、大鼓に甚兵衛、狂言に藤次郎・武大夫・五十郎・只六がいたことも確認できる。

享保3（1718）年4月6日には金沢城で前田利章饗応能があり、4月15日には同じく金沢城で豊姫から前田利章への御膳進献能が行われた。後者の豊姫御膳進献能で諸橋権進〈玉井〉のツレ、竹田権兵衛〈安宅〉のツレを勤めた新次は、享保2（1717）年11月に大聖寺居館で新十郎〈弓八幡〉のツレを勤めた金沢の町役者、指物屋新次と同一人物である。新次は享保3（1718）年4月の前田利章饗応能、御膳進献能を勤めた直後の同年7月、前田利章に召し出され、大聖寺藩御徒組の士分、松見主馬となる（前掲『大聖寺藩士由緒帳』）。

享保4（1719）年3月16日には江戸の加賀藩邸で左大臣二条綱平饗応能があり、前田利章は仕舞を舞っている（いずれも『大野木克寛日記』）。前田利章の藩主在任期に加賀藩との接触・交流が頻繁なのは、加賀藩主前田綱紀の実子、世嗣前田吉徳の実弟という血縁の濃さも反映するであ

ろう。大聖寺藩先代の前田利直は前田綱紀の従弟に当たり、加賀藩への依存度は前田利章より小さかった。前田利章は金沢でも江戸でも実家へ帰る感覚で父・兄・姉の饗応を受け、気兼ねなく演能もしている。

同年7月27日、前田利章は江戸の大聖寺藩邸に将軍徳川吉宗から拝領した鷹狩りの雲雀を披露するため、松平紀伊守信道（丹波亀山藩主）、植村土佐守正朝（上総勝浦藩主）ら客人を招き、この時は宝生丹次郎（宝生大夫暢栄）と地謡3人を呼んだ（『一蓬君日記抜書』）。野尻与左衛門は享保10（1725）年4月17日に病没し、『一蓬君日記抜書』は享保8（1723）年10月晦日を大尾とする。同書記載の能楽関連記事は本事項が最後となる。

加賀藩主前田綱紀は享保9（1724）年5月に江戸で病没し、同年7月に前田吉徳が藩主となって初めて入国する。金沢城では享保10（1725）年9月・10月の前田吉徳入国祝賀能（寺方招請を含めて6日間）、同年10月25日の宗辰誕生祝賀能、享保11（1726）年2月15日の鶴拝領披露能と大規模な催能が続いていた（『御用内留帳』ほか）。

前田利章は元文2（1737）年9月6日に大聖寺で病没する。『一蓬君日記抜書』以後、前田利章病没までの期間の空白を埋める資料は大聖寺藩にまとまったものが伝存しないが、『大野木克寛日記』によれば享保11（1726）年2月26日、金沢城で参勤途中に立ち寄った前田利章の饗応能¹⁵⁾、享保13（1728）年2月19日、金沢城で前田利章饗応能¹⁶⁾の催行があった。後者について、『大野木克寛日記』には、饗応に随伴した大聖寺藩士の名前を列挙する中、物頭並松見主馬が人選に洩れた理由について、迎える金沢側でとかく口の端にのぼったとしている¹⁷⁾。

その松見主馬とは、同書の小字注記によれば、もとは金沢の町人のせがれで指物屋新次と言い、諸橋権進のツレを勤めていたが、大聖寺へ召し出されてツレを勤め、知行150石・物頭並の士分に取り立てられた者である。前田利章が金沢の外聞に配慮して今回は伴わなかったという憶測がささやかれたらしい。なお、徳川幕府では徳川吉宗が将軍に就任した後、能役者の士分登用は廃止されている¹⁸⁾。

大聖寺居館では享保2（1717）年暮以来、規模の大きな催能は実現していない。金沢の町役者指物屋新次を士分に登用してまで大聖寺藩の役者を必要としたのは、前田利章が金沢や江戸で自演する機会に備えて稽古相手をさせ、加賀藩における諸橋権進の役割を期待したと推測される。登用は指物屋新次1人という結果からすれば、笛方（鷺田五郎兵衛）や大鼓方（鶴来屋庄七）をも抱えて催能を充実させる考えはなかったことになる。

おわりに

冒頭に述べたとおり大聖寺藩の能楽はこれまでまとまった研究がなかった。本稿によって明らかになったことは以下の諸点である。

まず、大聖寺藩最初期から能楽が盛んであったとされる旧説について、旧説も認めるように初代前田利治・2代前田利明の藩主在任期には能楽催行の記録が見当たらず、徳川幕府や加賀藩の

状況に照らしても、大聖寺藩で能楽の体制を整備する段階になかったと言える。また、旧説では3代前田利直・4代前田利章の藩主在任期にも能楽催行の記録がないとされるが、本稿では催能・演能の記録を多数列挙することができた。

大聖寺藩の能楽の歴史は3代前田利直の江戸城演能に始まる。将軍徳川綱吉の奥詰を務めた前田利直は、徳川綱吉の命により、元禄年間中期に6度、江戸城で能または舞囃子を演じた。江戸の大聖寺藩邸では、隣接する加賀藩邸から加賀藩主前田綱紀の訪問を受け、饗応に能楽を供した。謡初も始めている。同じ年に、加賀藩では世嗣前田吉徳が9歳で能芸の稽古を始め、5年後には徳川綱吉の加賀藩邸御成があった。前田利直も前田家一門として徳川綱吉を出迎えている。将軍御成の饗応は徳川秀忠・徳川家光時代の観能（演者は玄人役者）の充実から《観能+演能・講書》へと重心が移った。

徳川綱吉の将軍在任期末期、前田利直はようやく大聖寺への入部を果たす。焼失していた大聖寺居館を新築し、入部と新殿への移徙を終えて都合4日の祝儀能を催行した。これが大聖寺における能楽催行の実質的な始まりである。前田利直は江戸に生まれ、長く江戸城に詰めたので、大聖寺の藩士や町方・寺社方・村方の有力者との関係を再確認する必要があった。村方招請の日には自ら3番の能を演じた。同時に家老宅への御成も繰り返し、正月には大聖寺居館で謡初も敢行している。

前田利直は江戸の風儀を大聖寺に持ち込み、近侍した徳川綱吉の姿勢に学んで、藩主の威厳を周知するとともに人心の掌握にも努めている。徳川綱吉没後は奥詰の任を解かれ、その後は自身も残り少ない晩年を大聖寺で過ごし、大聖寺居館や家老宅で私的な催能・演能に慰みを見だしていた。

加賀藩主前田綱紀の子前田利章は、大聖寺藩主前田利直の末期養子となり、家督を相続した。加賀藩の世嗣前田吉徳が9歳から能芸の稽古を始めた事実には照らせば、1歳下の前田利章も間もなく金沢で能芸の稽古を始めたと推測される。前田利章は大聖寺入部以前に江戸の加賀藩邸で1度演能し（松姫招請能）、また前田綱紀から小謡・囃子で相続と入部を祝福されている。

前田利章入部直後の大聖寺居館では家中惣御目見の囃子・仕舞、入部祝儀能のいずれも前田利章自身が演じる姿を家中に拝見させている。翌年正月の謡初も同様である。藩内の政治情勢の流動化により、大規模な催能は徳川吉宗将軍宣下祝賀能直後の1度（3日間）にとどまったものの、金沢の町役者を呼び寄せたその時も、前田利章は舞台に立った。

大聖寺での催能・演能に制約はあったが、金沢城に主客として招かれ、あるいは参勤交代途中で立ち寄り、父の前田綱紀、兄の前田吉徳、姉の豊姫から数多く饗応能を供されている。その折々に自身が演能を披露している。演能経験の豊富な藩主には演能を楽しんでもらうことが何よりももてなしになる。御成能・饗応能の重心の移動は地方でも定着してきた。

このように大聖寺藩の能楽は大聖寺だけでなく、江戸・金沢も視野に収めて、その展開を追跡する必要がある。また、藩主の活動は大方把握できたが、催能時や日常の稽古を支える役者につ

いては、下級武士と町人を主とすることや、若干の役者名と役籍が知られるに過ぎない。5代藩主前田利道以降、大聖寺藩の能楽が藩内に浸透する過程で、関係者の数が増え、役者の素性も次第に明らかになるであろう。根拠資料も例えば前期に『一蓬君日記抜書』が担った役割を、中期は『笠間日記』が引き受けるはずである。江戸・金沢の状況と資料も当然変遷する。今後は本稿の成果を踏まえて、大聖寺藩中期・後期の能楽を精査してゆきたい。

注

- 1) 拙稿「加賀藩の御細工所と「加賀宝生」—その始まりの頃—」（『別冊太陽 工芸王国金沢・能登・加賀への旅』平凡社、2021.10）参照。
- 2) 表章・天野文雄『岩波講座能・狂言 I 能楽の歴史』（岩波書店、1987）。
- 3) 注1) に同じ。
- 4) 注2) に同じ。50回の機会に71番の能と150番以上の舞囃子を舞ったという。
- 5) 野尻与之佐「一蓬君日記抜書（上・中・下）」（『えぬのくに』18～20、1973.3～1975.4）、『大聖寺藩の武家文書（2）』、『大聖寺藩の諸家文書（2）』に収載する。
- 6) 元和・寛永期の御成能の規模については拙稿「元和・寛永期加賀藩邸御成能番組集成—加越能文庫蔵御成記録を主として—」（『金沢大学国語国文』34、2009）、同「加賀藩江戸藩邸御成記録と能番組—前田家三代利常治藩期を中心に—」（『能と狂言』7、2009）参照。
- 7) 『一蓬君日記抜書』には1月6日条に御能御興行の記事が見える。
- 8) 注2) に同じ。
- 9) 梶井幸代・密田良二『金沢の能楽』（北国出版社、1972）の「加賀藩の謡初め」に「よく引かれる」記録の最初に『政隣記』当該記事（寛保3年は同2年の誤植）を挙げ、規式の内容は他の4資料と比べて「繁簡の差はあるが、ほぼ似ている」とする。
- 10) 竹田権兵衛は江戸藩邸の御成能や金沢城の大規模な催しに出勤するほか、年頭の能や謡初のために京都から定期的に金沢へ来ていた。
- 11) 山口隆治『シリーズ藩物語 大聖寺藩』（現代書館、2020）。
- 12) 『大野木克寛日記』の引用・要約は長山直治監修・高木喜美子校訂・編集『大野木克寛日記』全7巻（桂書房、2011）による。
- 13) 注9) の『金沢の能楽』に翻刻がある。
- 14) 『大聖寺藩の武家文書(2)』及び『大聖寺藩の諸家文書(2)』所収の『一蓬君日記抜書』記載の番組は、
弓八幡 新十郎・助之進／田村 覚右衛門・小左衛門／東北 助之進・五郎兵衛／御中入／自然居士 助之進・覚右衛門／祝言猩々 新十郎・覚右衛門／狂言 武太夫・五十郎・藤次郎

とあるだけで、〈田村〉のシテ小隼人、〈東北〉〈自然居士〉のシテ公（前田利章）ほか、重要な情報を欠いている。理由は不明である。

- 15) 準備の様子は加賀藩御細工奉行有澤森右衛門武貞の『御用内留帳』（金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫蔵）、番組は前掲『御能御囃子御番付帳』等に記載がある。『加賀藩御細工所の研究（二）』（金沢美術工芸大学美術工芸研究所、1993）第三章「御細工者の兼芸」（長山直治・西村聡）参照。
- 16) 準備の様子や番組は注 15) の『御用内留帳』、金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫蔵『御能一卷控帳』、前掲『御能御囃子御番付帳』等に記載がある。
- 17) 本記事は拙稿「『大野木克寛日記』から見た加賀藩中期の能楽」（『芸能史研究』194、2011）でも言及した。なお、『一蓬君日記抜書』享保7（1722）年3月4日条に前田利章の鷹狩りの供の1人として松見五郎九郎の名前が見えるが、松見主馬の通称であったか否かは不明である。松見主馬は享保16（1731）年に36歳で病没している（『大聖寺藩士由緒帳』）。召し出された時は18歳であった。
- 18) 注2) に同じ。

謝辞

本稿に使用した資料の閲覧・収集に御便宜を賜った金沢市立玉川図書館近世史料館並びに小松市立図書館、山口隆治氏翻刻の私家版諸文献等の存在を御教示くださった加賀市教育委員会事務局文化課の柳井百合子氏に御礼申し上げます。本稿は令和6年度～令和8年度科学研究費補助金・基盤研究（C）「近代能楽史の展開と旧大聖寺藩主前田利邨の活動」（課題番号 24K03627）の研究成果の一部である。